慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーザル・カイヴァーン学派研究6 : Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukhtの写本蒐集と翻訳校訂
Sub Title	The study of Āzar Kayvān school 6 : Japanese translation of the Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht
Author	青木, 健(Aoki, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.1- 16
JaLC DOI	10.14991/005.00000051-0001
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーザル・カイヴァーン学派研究 6

－*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂－

青　木　　健

本稿の研究対象は、*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*と題された近世ペルシア語文献である。本稿は、下記の一連の研究の続編に当たる。

青木健　2015年a：「アーザル・カイヴァーン学派研究―*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂―」、『東京大学東洋文化研究所紀要』（第167冊）、pp. 348 (157) - 302 (203)。

―2015年b：「アーザル・カイヴァーン学派研究2―*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂―」、『東京大学東洋文化研究所紀要』（第168冊）、pp. 147(174) - 77(244)。

―2016年：「アーザル・カイヴァーン学派研究3―ポスト・モンゴル期のイスラーム思想史に於けるアーザル・カイヴァーン学派―」、『東京大学東洋文化研究所紀要』（第169冊）、pp. 184(379) - 97(466)。

―2017年：「アーザル・カイヴァーン学派研究4―*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂―」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』（第48冊）、pp. 9-31。

―2018年「アーザル・カイヴァーン学派研究5―*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂―」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』（第49冊）、pp. 1-19。

この文献の新出写本と、ゾロアスター教研究史上及びアーザル・カイヴァーン学派研究上の位置付けについては、2015年aと2016年を参照。§§1-

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 51 号（2020）pp.1~16

27の校訂については、2015年bを参照。§§28-30の校訂については、2017年を参照。§§31-34の校訂については、青木2018年を参照。本稿では、§§1-12の日本語訳を提供する。

*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht va Keyfīyat-e Ū*翻訳

［fol. 50v］

モーベダーン・モーベド、ダーダール・ダードドゥフト[1281]の物語とその性質［についての解説］の始め。全能にして慈悲深き神の御名において。

1）パフラヴィー・ペルシア語[1282]のマーニー[1283]の著作（daftar）のうち、彼を「ラーステ（正しい）」と呼んでいるものがある。ダーダール・ブン・ダードドゥフトは、「モーベダーン・モーベド」を為した[1284]。その時シャーハーンシャー・シャープールは息子［皇子？］だった[1285]。そして、このダーダール・ダードドゥフトは、人々が「ラーステ（正しい）」と呼ぶような「神の光輪を有する者」[1286]だった。その色（gunah）の意味は、［近世］ペル

1281 近世ペルシア語の原義は「公正なる者、正義の娘の息子」。本書では、サーサーン朝時代初期の人物と設定されているが、実在した可能性はほとんど無い。

1282「パフラヴィー・ペルシア語」で、イスラーム以前の中世ペルシア語（パフラヴィー語）の意味を持たせている。

1283 マニ教の教祖マーニー・ハイイェー（216年～277年）を指し、彼の著作への肯定的な評価が語られている。しかし、マーニーは、ゾロアスター教文献の中では、一貫して不倶戴天の敵として記述されているので、もし本書がゾロアスター教文献だとしたら、評価を180度逆転させていることになる。これが、筆者が本書をゾロアスター教文献と見做さず、アーザル・カイヴァーン学派文献と評価する理由の一つである。

1284 イラン・ゾロアスター教神官団の最高位、モーベダーン・モーベドに就任したと云う意味。当時のインド・ゾロアスター教神官団の最高位はダストゥールなので、本書はイラン・ゾロアスター教神官団に関する知識を背景にしている。

1285 シャープール1世（在位240年～270年）の父親アルダフシール1世（在位224年～240年）の治世だったと云う意味。

1286 München写本とNavsari写本の異読に従い、خوره مند でとる。khurih va mand ⇒

シア語によって説明があってしかるべきであろう。

偉大なる師アブー・マァシャル・ブン・チェヘシュハーイーン・メフラバーン（Abū Ma‘shar ibn Cheheshhā’īn Mehrabān）[1287]——彼に慈悲を——は、彼にこの本を「教えの言葉」[1288]からダリー語[1289]に移してくれという要望があった。即ち、［それを］欲するどんな者にもよく理解できるようにと。モーベダーン・モーベドのアブー・ナスル・ブン・ソルーシュヤール・ブン・アーダル・ハッラード（Abū Nasr ibn Sorūshyān ibn Āzar Kharrād）[1290]——ダーダール・ダードドゥフトの血筋の後裔であるアードゥルバード・マフラスファンダーン（Ādurbād Mahrasfandān）[1291]の子孫である——は、その［教えの］ことばの正しさと報酬を自身の魂に、天国に届けるためにも、その教えの言葉を——神がお赦し［になった限り］で——新たにすることが必要とみていた。

2）バーバクの子シャー・アルダシール［の子］、シャーハーンシャー・

---

khvarahmand。

1287 実在不明の人物。しかも名前の前半「アブー・マァシャル」は、サーサーン朝時代の人物とされているにも拘らず、アラビア語である。本書がフィクションだとしても、相当お粗末な設定である。

1288 原語の「パフラヴィー・ペルシア語」を指す。

1289 文脈から言えば、近世ペルシア語を指す。

1290 筆者の理解では、「アーダル・ハッラード」は、アーザル・カイヴァーン（1533年～1618年）の12高弟の第2位アーザル・ハッラードに当たる。従って、このアブー・ナスルは、アーザル・ハッラードの孫と設定されていることになる。アーザル・ハッラードは、シーラーズでアーザル・カイヴァーンに弟子入りし、1620年に亡くなった。

1291 この人物は、シャーブフル2世時代に実在したゾロアスター教の大神官である。つまり、本書のフィクションでは、ダーダール・ダードドフト（3世紀の架空の人物）⇒（略）⇒アードゥルバード・イー・マフラスパーン（4世紀の実在の人物）⇒（略）⇒アーザル・ハッラード（16～17世紀の実在の人物で、アーザル・カイヴァーンの高弟）⇒ソルーシュヤール（実在不明）⇒アブー・ナスル（実在不明）との系統図が描かれ、最後のアブー・ナスルの要請によって、アブー・マァシャル・ブン・チェヘシュハーイーン・メフラバーンが、本書をパフラヴィー語から近世ペルシア語に訳したことになっている。

シャープール［1世］の時代[1292]——神よ、彼を赦し給え——、誰かが［人を］遣わして、ローマのパードシャーである皇帝（qaysar）アブールニユーシュ（Abūlniyūsh）[1293]に頼んだ。ローマの賢人らには、幾つかの医学の著作（daftar）があったし、また古代の賢人たちも、ソクラテスやアリストテレスがそうしたように［医学に関する著作を］成していた。そして、ローマ皇帝（qaysar）は、［それに応えて］遣わしたのだった。そして、幾人かの医学の師たち——ヒヤーヌーシュ[1294]やその他の医師にして賢者——が医学の本（ketāb-hā-ye bezeshkī）を持ってきた。シャーハーンシャー・シャープールの宮殿に彼らが到着し、それらの本を献上した時、これら知識人は、公にはされていなかった善き宗教[1295]の足らないところを［指摘］し（besyār noqsān-e dīn-e beh keh basteh kashtī and be-kardand）、そして言った。「貴方がたが行っている知識や宣教では（īn ‘ilm va da‘vī keh shomā mīkonand keh）、

［fol. 51r］

『クルアーン』[1296]は至高なる神の言葉とともにあり、奇蹟をゾロアスターに送ったとのことであるが、それが正しければ（それがそうであらねばならぬようにあるというのならbāyad ya‘nī bāyastī keh）、医学の優れた技術（ehkām）や解剖（tashrīh）の知識は、貴方がたのこの『クルアーン』から出てくるはずであり、貴方がたにとっては全てのことが知っていることであり、必要でないものあるはずなのに、今、『この医術の学は、誰かの役に立とうが立つまいが「知」であり、そこから治療法が見出せる』として、私た

1292 アルダシールを「シャー」とし、シャープールを「シャーハーンシャー」とする称号の付与は、史実に即している。

1293 シャープール1世と同時代のローマ皇帝だとしたら、ゴルディアヌス3世からアウレリアヌスに至る軍人皇帝が当て嵌まる筈だが、この名に対する該当者はいない。これもフィクションであろう。

1294 正体不明。おそらく、フィクショナルな人物。

1295「善き宗教（Beh Dīn）」は、ゾロアスター教の自称。

1296 ゾロアスター教の聖典の名称は『アヴェスター』であるが、ここではイスラームの聖典『クルアーン』の名で呼ばれている。宗教の聖典全般を『クルアーン』と総称しているようだが、ゾロアスター教徒の用語法としては、相当の違和感がある。

ちから手にいれようとしている。」

3）そこでモーベダーン・モーベド、ダーダール・ダードゥドフトは、以下のように答えた。

「知るがよい、そして気づくがよい。貴方がたが知っている医術、そして薬のこの知識、そしてそこからさらに人体の基本の器官、そして血管の解剖学的知識を、貴方がたは理解し、知るようになった。もはや何の望みも見いだせないような長い病気になった者は、殺したり、あるいは死亡してから、その者を頭まで甕に（kham/khum sar keh yā）あるいはオリーブの油に置いたり、あるいは彼の腹を切り開いたり、彼の血管や器官を切り刻んだ（tā hadd kardandī）。こうすることで、彼がどのような苦しみを持っているかが、貴方がたには明らかとなった。我々の宗派では、死んだ者や殺された者を見ることは許されず、［宗教的に］正しいことが死んだ者には為される（rāst-hā bar mordeh kardan）、我々は彼［死んだ者・殺された者］に穢れを持っていて［穢れを認めていて］（va mā ān-rā palsīd dārīm）、触るようなことはしない（va momasseh nakonīm）。何故なら、［それは］大きな罪だからである（keh bezeh-‘e azīm ast）[1297]。貴方がたが他の知識――器官だったり、解剖だったり血管だったり――を知ったのは、この経験による（va dīgar ‘ilm-e shomā dānestan va a‘zā va tashrīh va ghurūq(‘urūq?) az īn tajribeh ast）。ギリシアのアレクサンダーが持っていたのは、我々の『クルアーン』や学説（mazhab）のうち良き部分で、その時はイーラーン・シャフルを征服し、ファールス（Jārs）・エスタフル（Estakhr）のアジャムの宝庫・財産（mulūk［本来は王malikの複数形］）を手中におさめ、帰属させていた。骨を折って我々の言葉でなされた知識を、アリストテレスは学び、ギリシア語にし、そして教えた（va ‘ilm-hā keh be-zabān-e mā be-takallof kard kardeh būdand, Aristātālīs

1297 この部分の記述は、完全にゾロアスター教の伝承に即している。このような箇所と、全くゾロアスター教にそぐわない記述が混在している点が、本書の評価を困難にしている。

beyāmūkht va be-zabān-e Yūnānī kard va beyāmūkht）[1298]。」

4）それから、この哲学者［ローマ帝国からやってきた哲学者］は、以下のようにも言われた。

「もし医術の学――このように我々は言うが――が、貴方の宗教の『クルアーン』からのものだとするならば、我々がこれから質問しようとしている質問に、貴方がたは答えなければならない。明瞭なことば、正しい語で、我々にも分かるように。もし我々の例［ローマ人の医学書の本のこと］のように答えることができなければ、貴方がたの『クルアーン』は至高なる神の言葉なのではなく、自身の言説により［我々を］うんざりさせていることに気づきなさい。」

5）ダーダール・ダードドゥフトであるモーベドたち[1299]は、答えて言った。

「あなた方にどんな意図がお有りであれ、質問なさるがよい。私が確信を以て知っていることは、どんなことでも示すつもりである。もし真っ直ぐに火の中を私が行き、正しく外に出られたならば、貴方の宗教はどのようなものかといった貴方が私に対してするあらゆる質問に、私は明白な完璧な明証で答えるだろう。」

6）そこで皇帝（qaysar）の使者だったラヒーヌーシュ（Rakhīnūsh）[1300]やビルーニユーシュ（Birūniyūsh）[1301]といったローマの知識人たちは、

［fol. 51v］

1298 この部分の記述は、パフラヴィー語文献の中にも見出せるゾロアスター教徒年来の主張。彼らによれば、「世界中の知識はハカーマニシュ朝時代にエスタフルの宝庫に収蔵されていたのだが、アレクサンダー大王がペルシアを征服した際にそれらの文献を持ち去り、ギリシア語に翻訳したのだ」とされる。

1299「モーベダーン・モーベドのダーダール・ダードドゥフト」あるいは「ダーダール・ダードドゥフトとモーベドたち」の誤記と思われる。

1300 実在の人物と同定できなかった。

1301 実在の人物と同定できなかった。

質問を始めた[1302]。

「人の身体は――モーベドたちよ――、

1. 香り（būy）、意識（hūsh）[1303]、規律（ā'īn）――アラビア語で「生得的行為 'amal-e gharīzī」と呼ぶもの――といったものが、年を重ねた人の身体に備わるのはどれくらい［の歳］なのか？
2. フラワフル（fravahr）[1304]と魂と風と火は、どのように、いつ歳を重ねた身体と一緒になるのか？
3. また身体の中でどのように立って［内在して］いるのか？
4. またそれらがそれぞれどんな働きをしているのか？
5. 身体の中の火は、生き物なのか否か？
6. なぜ規律（ā'īn）と知恵（kherad）と聞くこと（gūsh）と歌うこと（sorūd）と知恵（kherad）[1305]は、他の生物の身体の中より（keh beh tan-e dīgar hayavānat）より［人間の体に］多く（bīshtar［or poshteh］）あるのか？
7. 7つの種類の星々は、善と悪とは、どの時間において人々に届けられるのか？　またどのように人々に達するのか？
8. 雄の卵と雌の卵は、身体の中で、どこにその場所を持っているのか？　どのようにあるのか、そして何に似ているのか？
9. 互いにどのように到達し、交じり合い（imtizāj）[1306]、またその違い（mokhālefat）はどのようにありうるのか？
10. 人の妊娠と他の生き物の妊娠の違いはどのようにあるべきか？　また彼女らの妊娠の死［死産？］は何から生じざるをえないのか？
11. 彼女らと「石の乳（shīr-e sankī）」との間の違いは何か？
12. なぜ香り（būy）はそこからなのか？
13. 乳を飲むことによる養育は、何年あるいは何か月なのか？　その他の

1302 以下では、ローマの賢人たちの質問内容を、便宜的に45節に分解して示した。

1303 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。

1304 ゾロアスター教で祖先霊を指す。

1305 ここでいきなり「知恵」が2回列挙されているが、後述のように、本書では「生得的知恵」と「訓育的知恵」を区別して考えている。

1306 MünchenとNavsariの異読に従い、امتزاج でとる。

もの［生き物］にとって、その［乳の］役割は他の何かであり、それぞれ2つ［乳と乳の役割を果たす何か］で養育は終わる。

14. 卵（khāyeh）から外へ出てくる鳥たちであるが、彼らには乳は必要ないのか？

15. また、どうして他の動物――良い香りのする（abnūyesh）[1307]虫たちのような小さなものたち（jiz-hā）――は、木や草や火や水から生まれ出てくるものの、彼らを産むのはどのようなのか？

16. 全ての雄と雌、良い香りのする（abnūyesh）動物たちは、何から由来するのか、またどのように知られるのか？

17. そして、何故それから、それら（jiz-hā）は目に見えるようになり、互いに似ていないのか？　それらすべてが実体というわけではないということなのか？

18. 外に出てきたものが体の中にあるということであれば、それは自己発生（tavallod）の原理ということになり、それらはその原理から現れたということになり、生物はそうではない［自己発生の原理ではない］ということになる。

19. この視覚、聴覚（sham‘ sam‘?）、味覚（tasn?）[1308]、発声（sorūd）、その他の法則は、どのように来るのか？

20. 夢を見ながら眠ること［text: būshāsq→(būshāsp)→būshāsb］、すなわち記憶を持ってきながら（思い出しながら）寝ること［text: khvāb kudasht→khvāb guẕasht］はどんな原因なのか？　そして何に由来するものか？　またどのように［眠りと夢が］交じり合ったのか？

21. 眠り［text: havāb→khvāb］・夢を見ながら眠ること［būshāsf］は、何に由来する［text: a→az］のか、人々にどのように届くのか？

22. 夢（khvāb）は見られうるものであるが、匂い、そしてまたは意識

1307 55vの5行目（段落番号19）に、انبویدن（Steingass: to smell sweetly, to scatter perfume）という動詞が出てくるので、その動詞の語根に یش をつけて名詞化したものとして解釈する。

1308 後ほど出てくる لمس（触覚）のことか？

[ūsh→hūsh[1309]]、風の様態（kiyān[1310]-e bād）、ないし霊（ravān）が見ているのか？そうでないのなら、それらは明朗に見える事柄（rawshan dīdār）であるはずである。

23. 体が眠っている時に［夢を］見るとして、夢を見ている最中に、その偽の泣く人、夢[1311]を見て泣いたりなど、人の夢に音声を与えること、［夢の中で］見ること（dīdār）、聞くこと（ushunūyesh）、休息［を感じたり］、悲しみを［眠っている］体に届くのはどこからなのか？

［fol. 52r］

24. また［夢を］見ている人に［夢を］見せる者は誰なのか？天界の者ら（mīnūvān）[1312]が見て、さらに見せるのであれば、貴方がたの学説（mazhab）がこれら天界の者らが如何なる正しくないものを見せないというのであれば、目が覚めている時にはそのような様ではないようなものを夢でたくさん見るのを必然とするものは、何なのか？

25. この夢を悪魔（dīv）が見せるというのであれば、それにより正しいものが神々と反対になってしまい、病弱なことは神的な業としてやってくることになろう。

26. もし［病弱なものが］神々からのものだというのであれば、それは［神々が］罪人（jāniyān）であるということを意味する。それが悪魔たち（dīvān）からのものだとすると、この夢を見させるというのはどんな利点があるのか、なぜ［夢の］一部は嘘で、一部は正しいのか？

27. 夢は体の中で見られるのか、あるいは体も眠っている状態で見られるのか？　もし体が眠っているということで、なおかつ目覚めた後の起きた状態でこれら［夢で］のことを人に「夢で何を見たか」を言うことができるのであれば、それはおそらくそれらが体と混合しているか

1309 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる

1310 様態 كيان はアラビア語の動詞 كان からの派生語であるが、シリア語にも ܟܝܢܐ（kyana）という単語で同じような概念がある（cf. スハ・ラッサム著『イラクのキリスト教』浜島敏訳、キリスト新聞社、2016年、63、280頁）。

1311 احتلام で読む。

1312「メーノーグ界の者たち」を意味するゾロアスター教的な概念。

らであろう。［つまり］半分は目覚めていて、半分は夢にあるのである。

28. 夢を見ている物体としての目は、起きている状態で様々なものを見ている目［と同じ］であるのか否か？　何故なら目は眠っている時も「見ている」わけであるが、目が2つの種類からなるというのはあり得ないからである。もし［目が］このように見ているというのであれば、2つの種類の様態（ahvāl）はどのようにあってしかるべきなのか？

29. また、視覚、聴覚[1313]、味覚、触覚、話すこと、［これら］全ては、この2つの種類［の様態］を見ているのである。夢の最中に［様態の］一部を見ているのであれば、起きている時も同様であろう。またもし夢において「見ている」人と、体に情報が与えられている人が、周知の事実である点、そして彼の知識がそれらに由来するという点において同一であるというのならば、なぜ赤ん坊として生まれた時から現時点に至るまでの時間で過ぎ去ったことを［記憶として］最初から持ってこられないのか？

30. もしこれ［夢］が体に情報を与える道具だとするならば、以下のことは［いかなる］必然によるものなのか？　体に何らかのダメージが与えられ、意識（hūsh）がその人から飛び[1314]、その飛んでいた意識が再びやってきた（戻ってきた）時、如何なる情報も与えられることがなかったり、あるいは意識のない状態でその人が何かから撃たれたとしても（体にダメージが与えられても）、何の情報も得ないというのは［どういうことだろうか］？

31. また天国の安らぎと地獄の苦痛が起きること、これを知ることができるようになること、これはいかなる必然によるものか？

32. 地獄に堕ちるほど［自身の］体を惑わす者は誰なのか？

33. また彼らは同じように絶望するまでに、［自身の］体を重い病気にする

1313 Navsariの異読に従い、سمع でとる。

1314 MünchenとNavsariの異読に従い、برود でとる。

ことはできるのか？

34. そして、回復し、健康な状態に再びなれるのか？

35. また、もし死が大悪魔（Eblīs）によるものだとしたら、悪魔の兄弟たちのうちどの悪魔が体に対してどのように［魂を］奪うのか？

36. 木（dar）、樹木（derakht）、植物の死は、人間の死と同じようなものなのか、それとも違う種類のものなのか？

37. 人は天国に、地獄にどのように辿り着くのか？

［fol. 52v］

38. 天国の安らぎと地獄の責め苦は、肉体に、あるいは霊（ravān）に、あるいは（kodām az īn muhtār chandīnkeh）に届くのか？

39. 何故、この世では肉体が罪業をなし、復活の［折の］天界の者ら（mīnūvān）では霊（ravān）に罰が示されるのか？

40. 報酬もなく、罪業も持たぬ者は、天国に行くのか地獄に行くのか？

41. 人の肉体の中に虚偽の悪魔（dorj）があるというのであれば――その虚偽の悪魔（dorj）が人の肉体を惑わせるのであるが――、肉体が死んだ場合――人間は生まれ、そして死ぬのであるから――虚偽の悪魔（dorj）はどこへ行くのか？

42. 肉体が死に、悪魔（shaytān）は残るというのであれば、人は悪魔の［生の］幅より短いということでなければならない（vājeb konad）。

43. もし悪魔は肉体とともに死ぬというのであれば、悪魔が死ぬというのが必ずしもそうでない（vājeb na-oyad）ことは自明である（zāher būdī）。

44. これらの総体を踏まえれば（va bedīn jomleh ast）、悪魔の死は必然とはならないというのが総じて言える（jomle ast）。

45. 死が訪れる者は、誰であれ物質的・肉的（josmānī）であるのは必然的である（vājeb āyad）けれども、短い（andak）かどうかは自明ではない（zāher nīst）。人が皆死に、無（nīst）になった時、一つの世界は、悪魔でいっぱいになってしまうだろう。

7）そこでモーベダーン・モーベドのダーダール・ダードドゥフト――神

よ許し給え、また他の天国［＝文意から言って地獄ではないか？］に（dar behesht dīgar）、敵どもに場を与えたまえ――は、彼ら［ローマから来た知識人］の間へ行き、以下の文で応えて言った。

「知りなさい、気づきなさい。貴方が質問した人の体の中の、香り、意識（hūsh）[1315]、霊（ravān）、規律（ā'īn）、生得的理性としての知性（kherad keh 'aql-e gharīzī ast）、労力（kūsh）、寒さ（sard）、訓育的理性としての知性（kherad keh 'aql-e ta'līmī ast）、風の様態のフラワフル（fravahr-e kiyān-e bād）、そして意識（hūsh）[1316] について、混合を人の体の中でどのように持っているか？　何の為に作ったのか（or 作りだされたのか）？　また我々がそれらをどのように知っているのか？

「ザルトシュト・スフィターマーン」[1317]の宗教では、以下のように明らかとなる。意識（hūsh）[1318]は生き物のよう（jānvarī）なのか否か、なぜ規律（ā'īn）と知恵（kherad）と聞くこと（gūsh）と歌うこと（sorūd）は、人の体においては多く、ほかの生物の身体には――［空白］――香り、霊（ravān）、意識（hūsh）[1319]は、雨・嵐・雪のように名前は別々であるが、もしそうでなく、それら全ての実体（jawhar）によってやって来るのなら、雨は単なる水であり、雪が解ければ嵐は全て水になる。まさにこのように、人間の体内にある意識（hūsh）[1320]、香り、霊（ravān）、知恵（kherad）は、名前はそれぞれに分かれており、それらはそれぞれに単独の働き［があるもの］として創造され、体から離されたとき、それら全てはアラビア語で魂（nafs）と呼ばれる霊（ravān）を為すのである。

風の様態（kiyān）は「冷」と「一」である。というのは、風を構成する実体（jawhar）は熱くもなく、冷たくもない。魂の実体は冷たくもなく、熱

1315 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1316 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1317 この部分はパフラヴィー文字表記。云うまでもなく、ザラスシュトラ・スピターマの中世ペルシア語読みである。
1318 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1319 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1320 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。

くもない。至高なる神（Īzad）は、この風をかくのごとく創造した。そこから世界の有益さと安らぎとがなされるものとして、そしていかなる災いもそこからなされないものとして。

［fol. 53r］

肉体に混合すると、性悪（patyāreh）がそこに達し、増加し、害ある人間となる。全ての生き物の気息（rūh）は風よりなり、そしてその風により立たされるのである。性悪（patyāreh）は全ての風に達し、全ての動物たちその呼吸でするまさにその風において増えたり減ったりする。まさにこのように大地や山は創造されるのであり、すべての可能態としてあるものは風からなるのである。

この5つの種類―視覚、聴覚（sham‘ [sam‘ ?]）、味覚、触覚の規律（ā’īn）は、それぞれ1つ1つの「場」は目（dīdār）であり、命の「場」は心臓の胸である。その証拠は、もし生き物たちから諸器官のうちの1つである手または足が切り離されたら[1321]、それでも生きながらえるのが大半であるが、腹が裂かれたり、源は気息（rūh）であり、気息と風が互いに友である時、全ての生き物、木、樹木、植物は、その「風」が魂から切り離されると、全て死んだり、枯れたり、ダメになってしまう。この正しい根拠からいって、風は1つの様態である。

風は山や大地の上にあるときは地震であり、山の上や大地の上ではまとめられ、それら［山や大地］の穴に閉じ込められる。そのトンネル（nafaqah）は風が包摂されるのである。

風は［人の］体にも閉じ込められ、穴がみつからないと、［人の体に］震えが起き、人間の体――まさに肉体において人間は異なるのであるが――の中で下へ下へと閉じ込められ、行ったり来たりをし、なお、［穴が］見つからず、五感（qūva banj）の原因（‘ellat）が明らかとなる。

そして火は人の体の中では熱であり、動物やそれぞれの植物の場合は［熱が］大地の中にある。最初の熱は火が土を焼き、［熱に］変え、大地から初

1321 MünchenとNavsariの異読に従い、جدا でとる。

めに出てきたあらゆる植物が頭を燃やしたのだろう（naqamad or tahamod konand）強い証拠である。そして男性の女性に対しての、母の子供らに対しての愛情（mehr）や思慕、またあらゆる生き物のあらゆる場所における動きは火に由来する。そして、人体の中の火は視覚（dīdār）であり、目にとって見ることを可能にする。同様に樹木（dar va derakht）に起こった場合も、［やはり］視覚であり、その行為は清浄である。木の葉はやがて実[1322]となる花［であり］、実の中の味は別で、育み、その場へと届けるのは火によるものであり、風の習慣による。そして木から火が外に出ると、［木の］全ては枯れてしまう。

その証拠は、火は生き物であり、火の糧は風によるものである。その証拠は［火の］指（火の粉？）が藁のある場所に達し、風があった場合、火の指（火の粉？）は燃え盛り、それ［藁］に跳び、［藁を］つかみ、［火の手は］より高くなる。これは、それぞれ2つが生き物であることの証拠である――それぞれ2つとは風と火であるが――。

他の証拠は、もし燃え盛る火ないし蝋燭、ランプが［ひとたび］ある場所へと置かれ、まさにその実体が魂（jān）であるところの風が飛び込めば、魂（jān）がそこから出てきて（be-nap(s?)and?）、そして死ぬということは起こらない［火は消えない］。まさにこのように、手か何かがある人の口に、風の通行の道がふさがれるように置かれた人は死ぬのである。

風が生き物であるという他の証拠は、もし誰かが腹に痛みを感じるのであれば、あるいはそれに類し火のようなものを起こし、その場所［腹］に置かれているものであれを抱えたら、そこには火が置かれているのである。生き物の恵みは風によるものであるが、その風は腹の下にあり、そのままであるようにされており、［風］自身を押し殺している。［火と風は］このようにお互い固く［結びあって］おり、分離するのが難しいほどである。このことに関する他の根拠は［火が］いかに薪を得て、葦より薪を食べても［火は］死んでしまう、また［火が］薪を食べ、葦を得なければやはり死んでしまうこ

1322 Münchenの異読に従い、بميوها でとる。

とにある。

10）[1323] 節――アラブ人たちに本性（tab‘）と呼ばれているところのフラワフル（fravahr）に関する質問の節。あらゆる時間に関連し、体を守り養うことを行うが、それはメーノーグから香りに知らされ、その香りは「知らせ（khabar）の香り」を意識（hūsh）[1324]とともに与え、意識（hūsh）[1325]に再び情報をもたらし、それは性質（manesh）と言われるもので、アラビア語では分別[1326]能力と呼ばれるし、思考する（mufakkir）［能力］とも呼ばれる。性質（manesh）がそれらを知らせるのである。

11）貴方がたがお尋ねになった規律（ā’īn）と知恵（kherad）と聞くこと（gūsh）と歌うこと（sorūd）と知恵（kherad）に関して。それに対しては［以下のように言われよう］。

それらは手の骨の関節に［宿り］場を持つ、肉体の記憶（hifze）と知恵（kherad）は骨の髄（maghz-e estekhvāne）に場を害のある一撃をなす。その根拠は、誰かが誰かと論争［になった］時、同時に害のある一撃となる。最初は言葉で正しいことを言っていても、誰かがその人に傷やら何やらを負わせようとすると、最初に手が傷［を負う］より前に出て、害ある一撃が出る。

12）なぜ人の体の中には、規律（ā’īn）と知恵（kherad）が他の動物の体の中より多いのかという問いに関する節。

動物は、すべての動物は昏迷しており、人の手の下［管理下］にある。どんなに［ある動物が］理性的であるにしても、人間がより動物を手の下へとおく。知恵の規律を多く持ち、聞くこと（gūsh）と歌うこと（sorūd）と知恵（kherad）を多く持つ者は誰であれ、教えることができ、世界は昏迷して

1323 第8節と第9節は存在しない。ペルシア語本文参照。
1324 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1325 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でとる。
1326 Münchenの異読に従い、ممیزه でとる。

いるが、知恵と聞くことと歌うことの規律の手の下にある。

同様に規律と知恵をより少ししか持たぬ者は、知恵を聞き、歌うことをより少ししか求めない。［動物の］所作、眠り、来世といったものは総じて不幸なものであることだろう。規律と知恵の場所が手の骨の髄（maghaz-e estekhvān-e dast）にあり、知恵を聞くこと・歌うことに関しては、その場所は脳（demāgh or damāgh＝鼻）と頭にあり、また体（andam）の髄（maghaze-hā）全てにあるのである。その根拠は、より内容豊富な（por-maghaz’tar）人は、より理性的な人であることである。